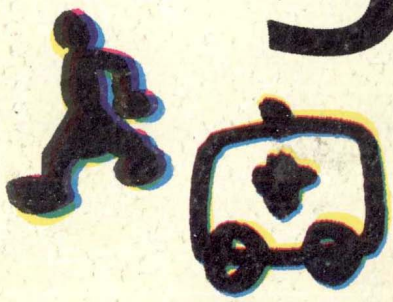
だから役にたつ仕事

～世紀末と格闘するマニアックな人々～

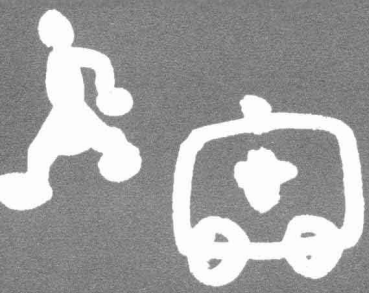


藤原智美

PHP

だから役にたつ仕事

～社人だ～



藤原智美

PHP

〈著者略歴〉
藤原智美（ふじわら　ともみ）
1955年、福岡市生まれ。明治大学政経学部卒業。以後、フリーランスのライターを経て、「王を撃て」で小説家デビュー。「運転士」で第107回芥川賞受賞。著書に『群体（クラスター）』（講談社）、『R（リアリティ）』（集英社）など。

だから役にたつ仕事
世紀末と格闘するマニアックな人々

1995年9月21日　第1版第1刷発行

著者　藤原智美
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
東京本部　〒102　千代田区三番町3番地10
第一出版部　☎03-3239-6221
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601　京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431
組版　朝日メディア㈱
印刷所
製本所　図書印刷株式会社

© Tomomi Fujiwara 1995 Printed in Japan
落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたします。
ISBN4-569-54896-2

だから役にたつ仕事

目次

❶ 地下鉄運転士……都市の「意味」をつなぐ 7
❷ 化学消防士……毒ガスのターミネーター 13
❸ ネズミ駆除士……超高層の笛吹き男 20
❹ ネオン管技工士……都市にきらめきをデザインする 27
❺ 首都高管制官……シミュレーションゲームプリーク 34
❻ 漏水発見士……真夜中の音の狩人 41
❼ 錠前師……日本のロック・スミス氏 48
❽ 工業潜水士……視界ゼロの孤独なプロフェッショナル 55
❾ エイズ検査技師……五ccの血液に未来を見る 61

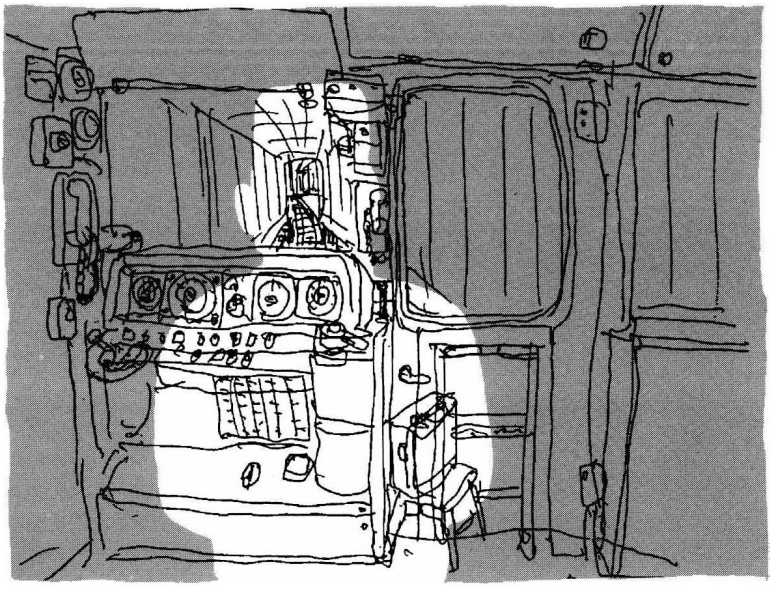
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

⑩ 恐竜ロボット製作者……美術とハイテクを操る学術の魔術師 68
⑪ 防犯・防災管制員……不安症候群から都市をガード 75
⑫ コーヒー鑑定士……世界を冒険する味の審判者 82
⑬ 愛玩動物埋葬係……ペット・セメタリーの守り神 89
⑭ 動物園飼育係……いまやイメージの博物館員 96
⑮ 都市ガス緊急保安隊員……謎の臭気ガスを追撃する 103
⑯ 探偵……スパイ、マフィアから不倫まで 109
⑰ ダッチワイフ設計者……ウレタンの性メディアを創作する 116
⑱ 手相師……街角のセラピスト 123

⑲ 調香師……四千の香りから神話をつむぐ 130
⑳ コンピュータ・バスター……電子の病原菌と闘いつづける 137
㉑ 気功師……宇宙エネルギーの中継基地 144
㉒ サイコ・セラピスト……苦悩を癒す苦悩する人々 151
㉓ 声紋鑑定士……声の捜査官 157
㉔ 美容整形医……コンプレックスを治療する 164
㉕ タレント養成所教師……フェイムへの夢先案内人 171
㉖ 植物エンジニア……二〇〇一年の新人類農民 178
㉗ 風水師……ドラゴン・ロードを読む 185

㉘ エレキギター修理師……二十年かけて電気の音を育てる 192
㉙ ゴミ収集作業員……都市の欲望の残滓をぬぐい取る 199
㉚ システムオペレーター……究極の脳内労働者 206
㉛ ゲーマー……肉体を捨てた電脳人類 213
あとがき……220

●イラストレーション……田中靖夫
●ブックデザイン……守先正（鈴木成一デザイン室）



1

地下鉄運転士

都市の「意味」をつなぐ

あたりまえのことだが、地下鉄は地下世界＝アンダーワールドを走る交通のネットワークである。アンダーワールドというくらいだから、地下鉄が都市に漂う闇の匂いを発散させていたっておかしくはないはずだ。だが実際は、闇どころか光に煌々と照らし出された清潔で管理の行き届いた空間である。

しかし、あの日、毒ガスがまかれ無差別なテロが行われたとき、人々はようやく地下鉄がアンダーワールドの闇を疾走しているということを認識したのだった。アンダーワールドでは、恐怖は底知れぬほど増幅される。

事件によって、もうひとつ明らかになったことがある。それは地下鉄の駅が、それぞれ都市の「意味」を象徴しているということだ。ターゲットとなった霞ヶ関駅は、官庁、官僚、行政といった意味を表象している。警察庁もここに属している。桜田門駅は警視庁＝警察、二重橋前駅は皇室＝天皇、大手町駅は大企業＝企業社会、国会議事堂前は文字通り国会＝政治である。

つまり、地下鉄は交通のネットワークでありながら、都市のかかえるさまざまな意味の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ネットワークでもあるのだ。だとすれば地下鉄運転士は、毎日、都市の表象をつなぎながら走りつづけているということになる。

不思議なことにたとえばＪＲ山手線には、そうした確固とした「意味」をもつ駅は案外見あたらないのである。新宿は歓楽街という意味と同時に都庁があり、あるいは超高層ビル群もあって、それぞれの意味が相殺され曖昧化される。都市の「意味」というのは地上ではなく地下の「場」によって象徴されるものかもしれない。

地下鉄サリン事件が起こるまで、地下鉄運転士が日常的に恐れていたのは、客のホームからの転落事故だった。酔っぱらいが過ってホームから軌道上に転落する。あるいは、自殺ということもある。不思議なのは、運転士によっては二度、三度と自殺者に遭遇する人もいれば、反対に一度も会わないまま退職する人もいることである。

自殺者は、たいてい線路の真ん中に顔を伏せてうずくまるものだという。運転士にとって表情を見ないですむだけでもいい。

しかし、遺体の収容はやっかいだ。ＪＲの場合、軌道上の所有権が会社にあるために独自に行える。だから、ものの十分ですむことも多い。しかし、都市の地下を運行する地下鉄の場合は事情が異なる。営団地下鉄では事故が起こった場合、まず、警察の到着を待っ

てその後に収容することになっている。だから、運転を再開するのに一時間ほどかかることもある。

運転士は、はじめから運転士として採用されるわけではない。駅員や車掌という職務に就きながら試験を受けてはじめて運転士となれる。しかし、運転士と車掌とで待遇に格段の差があるのかといえばそういうことはない。サラリーはほんのわずかに違うだけだ。にもかかわらず、事故にたいする責任は重い。だから、最近では運転士を敬遠する傾向もなくはないという。ぼくは三人の若い運転士に会った。だれも強烈な責任感と仕事への熱意を感じさせる人ばかりだった。

彼らはなぜ運転士になったのか？

ぼくなどは地下の狭い軌道を運転する仕事が退屈でつまらないものにしかおもえない。そこには変化する風景もなければ、季節の微妙な移ろいを感じることもむずかしい。一本のトンネルとホームの連続で構成される単調な空間には、昼、夜の区別さえない。

ところが、地下鉄にも変化する風景があるという。トンネルの形状からしてさまざまだ。長方形あり、円形あり。壁面ものっぺりしたコンクリートに囲まれたものから、あばら骨のように溝が刻まれたものもある。

運転席前方に見える視野の広がりにも変化がある。一本の軌道しか見えないときもあれば、二本、四本と見えることもある。分かれていく線路の向こうに地下車庫がかいま見えることもある。

意外に知られていないのは地下鉄が起伏の多い軌道を走っているという事実である。たとえば、千代田線の代々木上原駅から代々木公園駅の区間。代々木上原駅は地上駅で代々木公園駅は地下にある。代々木上原駅を出発した電車は、ゆっくりと速度を増しながら、ややカーブした軌道を進む。しだいにそれは下りはじめ、やがて前方にぽっかりとあいた地下世界への入り口が見えてくる。そのころになると、電車はグングンとスピードを増して、ついにはアンダーワールドへと侵入していくのだ。

もちろん、地下に入ってからも軌道の起伏はある。何本かの路線が交差する場所などは、新しい路線ほど下を走らなければならない。その分、きつい傾斜も出てくる。しかし、乗客はこうした地下世界の風景を知る機会はほとんどない。窓ガラスに映るのは、疲れた自分の顔でしかなかったりする。

ただ、一部の路線には運転席と客席を仕切る壁に窓がもうけられた電車が走っている。窓は右側だ。左側には運転席がある。この窓に顔を思いきり寄せて、車内灯の反射を両手

でさえぎって前方をのぞけば、変化する風景というものを楽しむことができる。もっとも、その子どもじみたふるまいに、いささかの恥ずかしさは覚悟しなければならない。

地下鉄はもっとも都市的な「場」であることは間違いない。だから、都市的世界を描く映画などに地下鉄は必要不可欠ともいえる。リュック・ベッソン監督『サブウエイ』などはその典型だ。

ところが、日本の映画に地下鉄が登場した例をぼくは知らない。地下鉄運転士を主人公にした小説を書いたとき、映画化の話があったが、地下鉄ロケの許可がおりなくてとん挫した。地下鉄にかぎらず、日本の公共施設は映画にたいしてひどく冷淡だ。

もしも、運転席からの地下世界を映像化できたらどんなだろうか？

きっとそこでは、ふだん乗客として知っている閉塞された地下鉄風景ではなく、おもいのほか広がりのあるアンダーワールドに遭遇することになるだろう。

そのとき、運転士は彼らだけが知っていた視野の特権性を剝奪されるのだろうか。安直に運転席にカメラが入らないというのは、その意味では〝正しい〟ことなのかもしれない。

2

化学消防士

毒ガスのターミネーター

テレビのスイッチを入れると、画面の中でオレンジ色のファイヤーボールがまるで生き物のように暴れていた。それを目がけて四方八方から何本もの放水が行われている。製油所の火災である。赤い炎に照らされて、入り組んだ鋼鉄の柱やパイプが浮かび上がって見える。遠景から眺める製油プラントは、独立した精密機械のようだった。

そのとき、ぼくはまるで『ブレードランナー』ではないかと思った。リドリー・スコット監督の『ブレードランナー』のオープニングは、二〇二〇年の未来都市の俯瞰シーンで始まる。酸性雨のなかに浮かび上がる巨大ビルディング群、空中に浮かぶネオンサイン、そして砂漠の油田のように炎を吹きあげるプラント。シド・ミードのデザインによる無秩序で甘酸っぱい退廃の匂いのたちこめたその映画のシーンと、テレビの火災シーンとが、ぼくのイメージのなかで美しい二重写しになった。

しかし、現実の災害現場は映画と違い生々しく陰惨である。九二年十月十六日、千葉県袖ヶ浦にある製油プラントの火災は十メートルもの火柱を上げる大規模なもので、九名もの死者を出した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.